古英語語順の不自由性

加藤　鉱三

1　古英語の語順については，従来はその自由さが強調される傾向にあったようであるが，近年その反動として，理論家であると否とを問わず，Mitchell (1985), Kemenade (1984, 1987), Koopman (1985), Hock (1985), Pintzuk and Kroch (1985) 等に見られるように，古英語の語順の自由さを強調するよりむしろその中にある規則性を重視し注目する傾向が広まっているようである。そしてそのような研究では，例えば人称代名詞，否定辞 *ne* 等の位置のように体系的に例外となるものを古英語の（表面的な語順の記述ではなく）基底語順を考える際に考慮から外し，それらは別に記述するべきであるという主張がなされているが，それは望ましい傾向であると思われる。

本稿では副詞句等，本動詞により下位範ちゅう化されない要素も古英語の基底語順に関する考慮から外すべきであることを提案し，そうすることにより古英語語順の隠された規則性がより一層鮮明に見えるようになるということを主張する。以下，本稿では2節において加藤（1988）の主張を概観し，以後の節においてその主張には一見多数の例外があること，しかしその反例は上のような提案を受け入れればそれは実は反例ではなくなるということを主張したい。

2　(1)は加藤（1988）の主張の一部である。

(1)　i)　定型動詞の表面上の位置は，動詞句内での基底構造での位置だけでなく INFL (AGR) の位置によっても左右されるので基底構造を必ずしも直接反映しない。しかし分詞を中心とする構文では分詞の表面上の位置は INFL(AGR) の位置に影響されないので，動詞句の基底構造を直接反映するものと考えられる。

ii)　Ælfric 説教集（10世期末）の古英語では，分詞を中心とする構文では OV, VO の両方の語順がおなじように認められる。その事と i) から，当時の英語の基底構造では [VP... V] と [VPV...] の両方が仮定されなければならない。[1] これは，主要部媒介変数が当時は無指定であったと考えればよい。

iii)　ii) の提案は，当時の英語が SOV 語順から SVO 語順への移行期に入っていたという事実を，表面に現れるものだけでなく基底部のレベルにおいても捉えており，従来の SOV→SVO という基底部における急激な変化という考え方よりもより現実的であろうと思われる。

もし(1)の考え方が正しいとすれば，当時の古英語の構造は(2)のようになる。[2]

(2)　[CP [C' C [IP NP [I' I [VP (V)..... (V)]]]]]

さて，古英語の助動詞は VP 補部をとる特殊な動詞であるとすれば，助動詞と本動詞を含む文の動詞句は(3)の四通りが可能であったことになる。[3]

(3)　a.　[VP [VP..... V] Aux]

b.　[VP Aux [VP..... V]]

c. [VP [VP V.....]Aux]

d. [VP Aux [VP V.....]]

(3b, c) では，内側の VP と外側の VP がおなじ種類の投射でありかつ直接の埋め込みになっているにもかかわらず，主要部の位置に関して性質が同じになっていないため許されない構造であったとここでは一応仮定しておく。[4] (3a, d) の助動詞 (Aux) は定型動詞となるために INFL(AGR) と結び付く必要があるが，それには(4)の二通りが可能である。[5]

(4) a. Aux の INFL(AGR) への移動

b. AGR の Aux への移動

(4b) は Travis (1984) がドイツ語の分析の際に提案している考え方だが，ここではそれをそのまま採用する。(4b) では主節では AGR の痕跡が適正統率されないが，従属節では CP の主要部に何等かの要素がありそれにより適正統率されると Travis は考えている。このことは，一般的に CP の主要部と IP の主要部とは相関関係（例えば現代英語の *that* と AGR, *for* と *to*）があることを考えればそれほど異とするところではないものと思われる。もしこれが正しいとすれば，(3a)はS構造のレベルでは(5a, b) または(6)のような構造となる。(5a)は主節であり，(5b)は従属節の場合である。(6)は主節でも従属節でもよい。

(5) a. *[CP [C] [IP NP [I e_i][VP [VP.....V] Aux+AGR$_i$]]]]

b. [CP [C ðæt$_i$] [IP NP [I e_i] [VP [VP.....V] Aux+AGR$_i$]]]]

p-govern

(6) ...[IP NP [I Aux$_i$+AGR] [VP [VP.....V] e_i]]]

同様に (3d) は主節で (7a)，従属節で (7b) となるか，或は主／従属節で(8)となる。

(7) a. *[CP [C] [IP NP [I e_i] [VP Aux+AGR$_i$ [VP V.....]]]]

b. [CP [C ðæt$_i$] [IP NP [I e_i] [VP Aux+AGR$_i$ [VP V.....]]]]

p-govern

(8) ...[IP NP [I Aux+AGR$_i$] [VP e_i [VP V.....]]]

従属節の Sbj Aux V...語順は (7b) と(8)の両方が可能であることになるが，表面上の違いはないので，以下本稿では区別せず(8)を代表させておく。[6] さて，(5b)，(6)，(8) は表面ではそれぞれ (9a, b, c) として現れる。[7]

(9) a. Sbj.....V Aux #

b. Sbj Aux.....V #

c. Sbj Aux V..... #

(9)の語順は古英語の助動詞を含む節の主要語順であるので，この点においては，上で述べてきた加藤 (1988) の主張の予測するところは古英語の事実と一致する。しかし，実はまだそれだけでは論証が不十分である。というのは，確かに(9)は主要語順であるが，今回筆者が調査した *Ælfric* 説教集 I, pp. 1-180 の中に(9)のもの以外の語順をもつ例が109にものぼるという事実があるからである。本稿の目的は，そのような例の例外となる部分にも共通する性質があり，それ故それは予測可能なものであるということを示すことにある。

3 その 109 例のうち(10)のように(9)のパタンにあわない要素が人称代名詞のみであるものが14例ある。[8]

(10) a. 40 : 26 We *mihton* eow *secgan* ane lytle bysne
'we might tell unto you a little simile'
b. 112 : 3 His deope rihtwisnys *nolde* hi *neadian* to naðrum
'his great righteousness would not compel them to either'
c. 156 : 19 þaþa þæt folc hine *wolde gestyllan*
'when the people would still him'
d. 162 : 12 þaþa ða Iudeiscan hine *woldon* on rode *ahon*
'when the Jews would hang him on a cross'
e. 158 : 30 To ðam leohte soðlice ure geleafa us *sceal gebringan*[9]
'to that light verily our faith shall bring us'

Kemenade (1984, 1987) が主張しているように古英語の人称代名詞は clitic であると考えれば，SOV，SVO というような主要要素の相互語順を考える際には人称代名詞は考慮から外して構わない，というよりは積極的に外すべきである，と思われる。もしそれが正しいとすれば，(10)における下線部の人称代名詞の位置は(9)のパタンに対する真の例外ではないことになる。

4 次に，(11)のような例が26例ある。これらは主語の前に助動詞が位置しているという点で(9)のパタンにあわないものである。

(11) a. 76 : 18 Nu *wæs* se bigleofa *gemett* on Iohannes byrgene
'now this food was found in the grave of John'
b. 24 : 29 þa *wæs* he *acenned* of þam clænan mædene Marian, butan ælcum eorðlicum fæder
'he was born of the pure virgin Mary, without any earthly father'
c. 12 : 23 Ða *wolde* God *gefyllan* and *geinnian* þone lyre
'then would God supply and make good the loss'
d. 124 : 11 Swa *sceal* eac se ðe... *cuman* to Godes sacerde
'so also should he who... go to God's priest'
e. 170 : 20 Ne *sceal* man *fandigan* his Drihtnes
'no one shall tempt his Lord'

このような例はすべて主節であり，かつ助動詞は節の第二位置にある。このような例は，いわゆる Verb Second 現象を示すもので，（助）動詞＋AGR の CP の主要部への移動によるものと考えられるため，助動詞の位置の基底語順を考える際にはやはり考慮から外すべきであろう。このように，(11)のような例も人称代名詞の場合と同様に(9)のパターンにあっていなくても真の例外ではない。

5 3，4節で見た二つの型以外に，(9)のパターンにあわないものは(12)のいずれかの型に当てはまる。[10]

(12) a. V Aux 型 : Sbj (...) V Aux...#
b. X V X 型 : Sbj Aux... V...#
c. X Aux 型 : Sbj... Aux (...) V (...)#

(12a) は Aux が節尾（＝動詞句の最後）にないという点で (9a) のパターンにあわない。

(12b) はVが節尾にないと見れば (9b) にあわず，或はVが Aux に直接後続していないと見れば (9a) のパターンにあわない。(12c) は Aux が動詞句の先頭にないという点で (9b) または (9c)のパターンにあわない。(12) 以外に，(12b) か (12c) か区別のつかない (13a) の型をもつものがある。この型は，(13b) の構造をもつとも考えられるし，(13c)とも考えられるので，ambiguous 型としておく。これらの例を表1に頁と行で示す。

(13) a. ambiguous 型：X Aux Sbj... V...

b. [CP X [C Aux+AGR] [IP NP [I *e*]... [VP *e* [VP V...]]]]

c. [CP X [C Aux+AGR] [IP NP...[I *e*] [VP *e* [VP V...]]]]

表1 AElfric 説教集 I pp. 1-180に見られる助動詞を含む例文のうち，(9)のパターンにあわない語順をもつ例

V Aux型	12：4, 12：24, 28：26, 30：33*, 34：13, 46：12, 48：13, 48：35, 70：5, 78：2, 90：27, 104：11, 146：19, 180：10
X V X型	4：7, 10：4, 10：32, 12：20, 16：28, 20：5, 28：24*, 32：7, 34：10, 36：9, 36：16, 38：15, 38：16, 40：32, 46：7*, 46：28, 50：2, 60：24, 94：22, 94：33**, 100：25, 110：31, 122：24, 122：34, 128：16, 132：20, 138：20, 138：25, 140：9, 146：25, 150：26, 152：6, 162：13, 162：15, 162：26, 162：33, 168：2, 168：25, 170：24, 174：24, 176：21, 176：31, 178：17
X Aux 型	30：19*, 38：22*, 60：2, 80：5, 82：16, 84：29, 86：14, 98：27, 106：3, 112：17, 114：14, 158：30, 170：22
ambiguous 型	10：2**, 18：8**, 20：23**, 34：23**, 38：16**, 46：7**, 96：20**, 98：13**, 104：5**, 146：9**

*：(9)にあわない要素として，人称代名詞も含む例
**：(9)にあわない要素として，CP の主要部へ移動した Aux も含む例

以下に各型のうち5例ずつ例文をあげておく。[11]

(14) V Aux型

a. 28：26 hu he [on ðysum dægðerlicum dæge] [on soðre menniscnysse] *acenned wæs* [on godcundnysse]
'how he on this present day was born in true humanity in divine nature'

b. 48：13 þæt se Hælend [swa] *geswutelod wære* [on heofenum]
'that Jesus should be so manifested in heaven'

c. 78：2 Þaða se Hælend *acenned wæs* [on æþre Iudeiscan Bethleem], [on Herodes dagum cyninges]
'when Jesus was born in the Judæan Bethlehem, in the days of Herod the king'

d. 90：27 þæt ge *healdan sceolon* [betwux me and eow]
'which ye shall hold betwixt me and you'

e. 180：10 Ac gif ðu *fæstan wille* [Gode to gecwemednysse]

'but if thou wilt fast to God's contentment'

(15) X V X 型

a. 16 : 28 þæt hi *sceolon* [mid eadmodnysse and mid gehyrsumnysse] *geearnian* [ða wununge on heofenan rice]
'that they might with meekness and obedience merit the dwelling in the kingdom of heaven'

b. 38 : 15 forðan ðe we *wæron* [þurh synna] *ælfremede* fram Gode
'because we were through sins estranged from God'

c. 50 : 2 [Witodlice] Stephanus *wæs* to diacone *gehadod* [æt ðæra apostola handum]
'now Stephen was ordained deacon at the hands of the apostles'

d. 128 : 16 Drihten *nolde* [gelaðod] [lichamlice] *siðian* to þæs cyninges untruman bearne
'the Lord would not, invited, go bodily to the king's sick son'

e. 168 : 25 ac he *nolde* nan ðing *don* [be ðæs deofles tæcunge]
'but he would do nothing by the devil's direction'

(16) X Aux 型

a. 60 : 2 and se wælhreowa Domiciaus [on ðam ylcan geare] *wearð acweald* [æt his witena handum]
'and the cruel Domitian was slain in the same year by the hand of his senators'

b. 80 : 5 þæt Herodes [betwux ðisum] *wearð gewreged* to þam Romaniscan casere
'that in the meanwhile Herod was accused to the Roman emperor'

c. 82 : 16 þæt ic [eac] *mage* me to him *gebiddan*
'that I may worship him'

d. 158 : 30 þæt ðe [næfre] ne *bið geendod*
'which shall never be ended'

e. 170 : 22 þeah ðe he [eaðe] *mihte* [butan awyrdnysse his lima] nyðer *asceotan*
'though he easily might, without injury of his limbs, have cast himself down'

(17) ambiguous 型

a. 10 : 2 Ne *mæg* nan gesceaft [fulfremedlice] *smeagan* ne *understandan* ymbe God
'no creature may perfectly search out nor understand concerning God'

b. 18 : 8 *Wearð* þeah þæt wif [ða] *forspanen* þurh ðæs deofles lare
'but the woman was seduced by the devil's counsel'

c. 34 : 23 *Næs* þæt cild [forði] *gecweden* hire frumcennede cild

'that child is [*sic*] (was) not called her firstborn child'

d. 104 : 5 nu *wille* we [eft] *oferyrnan* þa ylcan godspellican endebyrdnysse
'we will now again run over the same evangelical narrative'

e. 164 : 14 Eaðe *mihte* Crist, [gif he wolde], on þissum life *wunian* [butan earfoðnyssum]
'easily might Christ, had he been willing, have continued in this life without hardships'

3節と4節の場合は下線で示された(9)のパターンにあわない部分は，それぞれ人称代名詞，CPの主要部へ移動した Aux，というように共通点があった。そこで，(14)−(17)の場合にも下線の部分に何等かの共通点がもし見られれば，3節と4節の場合と同じように(9)のパタンにあう必要がなかった何か体系的な理由をもっていた，という事がいえるようになるものと思われる。それでは，そのような共通点はあるのだろうか。

6　筆者は Kato (1985) において，今回とおなじ資料の範囲のデータから，古英語では本動詞が名詞句（目的語）と前置詞句を同時に下位範ちゅう化している場合にはその相互語順は（本動詞がどこにあるかにかかわらず）ほとんどの場合，名詞句−前置詞句であるが，一方目的語と下位範ちゅう化されない前置詞句が文中にある場合はその相互語順は名詞句−前置詞句もあれば，前置詞句−名詞句という順番も自由にあった，という事を述べた。このことから，古英語では本動詞により下位範ちゅう化される要素は語順が決っているが，そうでない要素は比較的自由であった，という事がいえるように思われる。

さて，(14)−(17)の例文では本動詞により下位範ちゅう化されていないと思われる（接続詞と主語以外の）要素はかぎ括弧で示してある。そして(9)のパターンにあわなくしている要素は下線で示してある。ここで，(14)−(17)の下線部は全てかぎ括弧の中にある，つまり全て下位範ちゅう化されていない要素であることに注意されたい。

動詞により下位範ちゅう化される要素は，Chomsky (1965) に従えば全て動詞句の中になければならない。ここでは更に，古英語では下位範ちゅう化されない要素は（もちろん動詞句の中にあってもよいが）少なくとも動詞句の中にある必要はなかった，と仮定しよう。この仮定により，古英語では(18)の語順は許されるが，(19)の語順は許されない，という予測をすることになる。[12]

(18)　..... [VP (V)... s... (V)]. ....

(19)　*... s... [VP (V)..... (V)]... s...

さて，今回の資料が助動詞を含むものに限定されているのは，そのような構文では助動詞と本動詞との位置関係により動詞句の範囲が(9)の.....の部分のように表面的に容易に見えてくるからである。今回は，(9)のパタンにあっている多数の例文は一切あげていない。これらの例文は(9)のパタンにあっているので，実際に観察される例文のうち大多数のものは(18)の構造をもつことになり，ここでの仮定による予測と一致する。そして，一見例外と思われた(9)のパタンにあわない例も，今まで見てきたようにそのあわない部分は下位範ちゅう化される要素ではなく，下位範ちゅう化されないと思われる要素であるので，これらも(19)の構造をもつのではなく実は(18)の構造をもつものであるという事がわかった。Kato (1985) で有効であった，下位範ちゅう化される要素か否か，という分類法はここでもやは

り有効であったということである。

それでは，古英語の助動詞構文の基底語順はどのような記述になるのであろうか。もし，下位範ちゅう化されない要素も基底語順の考慮に入れれば，(9)のみならず(12)の表面語順から抽出しなければならず，その結果基底語順は極めて複雑なものになるであろう。しかし，もし上で述べてきたように下位範ちゅう化されない要素を基底語順の考慮から外したらどうなるであろうか。その場合，表面語順として(9)のみを考慮すればよいので，(3a, d) のみを許すような基底部，つまり加藤 (1988) で主張したように，主要部媒介変数の値に，head-first/head-last 以外に「無指定」というオプションを仮定し，その上で (3b, c) を許さない何等かの配慮をするだけで済むのである。

7　もし上で述べてきたことが正しいとすると，次のようにいえることになる。古英語の助動詞を含む構文は，主要なパタンである(9)の配列以外の語順をもつ例も相当数あり，このことから一見古英語の語順はかなり自由であったということがいえそうであった。しかしそのような例文をよく調べてみると，例外的な部分は本動詞により下位範ちゅう化されない要素であるので，これらが(9)のパタンにあわないのは例外であるからあわないのではなく，理論が許しているからあう必要がなかったのである。このことは言い方を換えれば人称代名詞，また本稿の下位範ちゅう化されない要素など自由であるものは，自由であり得る理由をもっているから自由であったのである。また，主要部媒介変数が無指定であったと仮定することにより助動詞，本動詞の位置は見た目の自由さにもかかわらず狭く制限して記述することが可能であり，古英語の語順を非常に複雑に見せている動詞句の要素も，下位範ちゅう化される要素は動詞句の中になければならない，という従来から用いられているごく当り前な区別により記述が劇的に簡単になるのである。このように，古英語の語順の複雑さ・自由さは見た目のような無政府状態ではなく，理論が許す範囲のかなり狭い変異でしかないのである，といえるように思われる。

8　しかし今回の調査の範囲で例外が全くなかったわけではない。(20)は下位範ちゅう化されているか，またはその疑いがある[13]と思われるにもかかわらず(9)のパタンにあわない要素をもつ全ての例である。[14]

(20)　a.　30 : 33 þe him *gesæd wæs* <u>be ðam cilde</u>
　　'that had been said to him concerning the child'

　　b.　70 : 5 ær he *acenned wæs* <u>of Marian</u>
　　'before he was born of Mary'

　　c.　146 : 19 þæt Crist *arisan wolde* <u>of deaðe</u>
　　'that Christ would arise from death'

　　d.　98 : 13 Þurh Cristes geleafan, and hiht, and soðe lufe, *beoð* singallice estfulle heortan <u>mid dæghwonlicere ymbsnidenysse</u> *afeormode* <u>fram leahtrum</u>
　　'through belief, and hope, and true love of Christ, are pious hearts (continually) cleansed, by daily circumcision, from their sins'

　　e.　152 : 6 þe *wæron* <u>be me</u> *awritene* <u>þurh witegan</u>
　　'that have been written of me by the prophets'

f. 114 : 14 ac ealle ðing <u>þurh Godes dom</u> *beoð geendebyrde*
'but all things are ordered by the doom of God'

(20 f)以外の例では，もし節尾の下線部がなければこれらは例外ではなくなるという点に注意されたい。[15] 生成理論を用いて古英語を記述しようとする最近の研究ではほとんどのものがＯＶ基底を仮定している。一方，従属節でのＶＯ語順は（特に後期古英語ではごく）普通に起こるが，この語順はＯＶ基底とは根本的にあわない語順である。そのため多くの研究で，この語順を説明するために(21)のように動詞句の要素を後置することを考えるのが普通になっている。[16]

(21) [VP..... V]#→[VP (...) V]...#

このような ad hoc な操作を，相当な頻度をもつ従属節の VO 語順に対して仮定するのは明らかに望ましいことではない。このような操作は，散発的にしか見られない(20)のような真に例外的な例に対してのみ仮定するべきであろうと思われる。

註

1) 以下本稿に現れる"....."はそこに必ず何等かの（音形のある）要素があることを示している。

2) (2)は Chomsky (1986) の X-bar 理論を前提としている。

3) 本稿では一貫して古英語の法（助）動詞を，少なくとも *have* や *be* と同程度には助動詞，つまり本稿では VP を取る特殊な動詞，であったと考える。

生成文法家による古英語の研究のほとんど全てのもので，古英語の法助動詞は助動詞ではなく本動詞として扱われている。それは Allen (1975), Lightfoot (1979) などが指摘するように，古英語では後に法助動詞となるものは目的語を取ることができる，など助動詞性が希薄であったと考えられるからである。しかし，現代語でも多くの助動詞が助動詞用法と本動詞用法の両方が可能であることから考えれば，古英語の法助動詞に当たるものに本動詞用法があっても何も不思議ではない。とすれば，法助動詞の助動詞用法を本稿では問題にしているわけだから，法助動詞を助動詞として扱っても何も問題はないものと思われる。

更に，Kemenade (1987) は古英語の法助動詞は基底では補文構造であるがＳ構造の段階では Verb Raising により VP 補部構造になっていると主張するが，それは結果的には本稿で仮定する構造 (i. e. (3)) と同じになってしまうことに注意されたい。

4) しかし些かその理由が薄弱であるようにも思えるので，これは今後の課題としたい。尚，この仮定によって (3c) は許されないが，この配列はもし許されているとすればＳ構造で (i) のようなものになるはずのものである。

(i) [CP [C C_i [IP NP [I' [I e_i [VP [VP V.....]Aux+AGR_i]]]]]

これは表面上は Sbj V... Aux という語順になるが，この語順は今回の調査では見られないものである。

5) (4)は助動詞がある場合であるが，助動詞がない文ではもちろんＶの移動となる。

6) 一つの構文に可能な派生が二通りあることは，加藤 (1988) の分析が正しくないことを示唆していることになるのかも知れない。しかし，もし仮にそうであったとしても以下に述べられる本稿の主張には直接影響しない。

7) #は節尾であることを示している。

8) 以下の例文では，助動詞と本動詞を斜字体，(9)のパターンにあわない部分を下線でそれぞれ表

すことにする。また，現代英語訳はテキストに付けられた編者（Benjamin Thorpe）のものをそのまま借用する。

9）（10e）は主語の前に本来主語の後ろにあるべき要素がきているという点でも（9c）のパタンにあわないが，これは明らかに話題化の結果である。ついでながら，この例はドイツ語，オランダ語等と違って，古英語では主節で話題化が起こっても次節で述べるいわゆる Verb Second 現象が義務的ではなかったことを示している。

10）注1と7を参照されたい。（...）はそこに（音形のある）要素がある場合もない場合も両方表している。

11）注8を参照されたい。尚，XVX型では，（13）の上の本文で述べたように，どちらか一方のXが（9b）または（9c）のパタンにあわなくしている点に注意されたい。

12）（18)—(19)では，'s' は下位範ちゅう化される要素を示しており，'...' は下位範ちゅう化されない要素が現れてもよい位置を示している。

13）標準理論の時代のようにもし受動動詞は対応する能動文の主語を下位範ちゅう化しないと考えられるとしたら，（20d，e，f）は真の例外とはならなくなるが，この問題は筆者には明らかではないので，今後の課題としたい。

14）（15)ではそのような要素を下線で表してある。下線部が二つあるものはそのどちらか一方だけが（9)のパターンにあわなくしている要素である。

15）（20f）については注13を参照されたい。

16）例えば，Kemenade (1987), Stockwell (1977), Pintzuk and Kroch (1985) 等。

Koopman (1985) はその例外として特筆するに値しよう。Koopman もやはり OV 基底を仮定しているが，今問題の語順については動詞句の要素を後置するのではなく，動詞を INFL へ移動することにより解決している。

OV 基底説のもいくつかの重大な問題点と，Koopman (1985) のそれ以外の問題点については加藤 (1988) を参照されたい。

Text

Thorpe, B. (ed.) *The Homilies of the Anglo-Saxon Church*, vol. 1 pp. 1-180. The Ælfric Society, London, 1846. (Johnson Reprint Corporation, New York, 1971)

References

Allen, C. L. (1975) 'Old English modals,' in *UMass Occasional Papers in Linguistics* 1, pp. 99-106.

Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, Cambridge, Mass.

Chomsky, N. (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Mass.

Hock, H. H. (1985) 'Pronoun fronting and the notion 'verbsecond' position in Beowulf,' in J. T. Faarland (ed.) *Germanic Linguistics; Papers from a Symposium at the University of Chicago*, IULC.

Kato, K. (1985) 'A note on the underlying structure of verb phrases in the homilies of Ælfric,' *Linguistics and Philology* 6, pp. 272-84.

加藤　鉱三(1988)「英語語順の変化と INFL」，近代英語協会第5回大会における口頭発表，未刊行。

Kemenade, A. van (1984) 'V2 and clitics in Old English,' in H. Bennis and W. U. S. van Lessen Kleoke (eds.) *Linguistics in the Netherlands 1984*, Foris, Dordrecht.

Kemenade, A. van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.

Koopman, W. F. (1985) 'Verb and particle combinations in Old and Middle English,' in R. Eaton *et. al.* (eds.) *Papers from the 4th International Conference on English Historical Linguistics*, John Benjamins, Amsterdam.

Lightfoot, D. W. (1979) *Principles of Diachronic Syntax*, Cambridge UP, London.

Mitchell, B. (1985) *Old English Syntax*, Clarendon, Oxford.

Pintzuk, S. and A. S. Kroch (1985) 'Reconciling an exceptional feature of Old English clause structure,' in J. T. Faarland (ed.) *Germanic Linguistics; Papers from a Symposium at the University of Chicago*, IULC.

Stockwell, R. P. (1977) 'Motivations for exbraciation in Old English,' in C. Li (ed.) *Mechanisms of Syntactic Change*, University of Texas Press, Austin.

Travis, L. D. (1984) *Parameters and Effects of Word Order Variation*, unpublished PhD dissertation, MIT.